

認知運動療法によるイリザロフ法後急性期疼痛に対するリハビリテーション

スカイ整形外科クリニック リハビリテーション科

西村朋浩・山下浩史

スカイ整形外科クリニック 整形外科

柏木直也

要旨：

イリザロフ手術急性期の患者において術後の疼痛コントロールが困難である患者をしばしば経験する。今回、そのような術後一週以内の5例7肢に対し認知運動療法を実施した結果即時的な効果が得られた。何れの患者にも特徴的な症状として、創外固定器や、疼痛に過剰な注意が生じていた。SLRにより股関節の運動を他動で行った場合に、股関節の運動を適切に知覚することはなく、股関節や下腿部が動いたなど、実際の運動と知覚された運動の間に明らかな不整合が確認された。この現象に対し、股関節への注意の改善を目的とした認知課題を実施した。その結果、股関節への注意が改善し不整合は解消され、全例において疼痛や運動機能障害に改善が認められた。今回の結果より、患者は必ずしも身体に生じている運動と同様の経験を有している訳ではなく、患者自身の経験を評価する視点が必要であることが示唆された。

イリザロフ法による変形矯正中の認知運動療法

スカイ整形外科クリニック リハビリテーション科

山下浩史・西村朋浩

スカイ整形外科クリニック 整形外科

柏木直也

要旨：

下腿内反内捻変形にイリザロフ法を施行した症例に対するリハビリテーションを経験したので報告する。変形矯正中にしばしば出現する疼痛や矢状面の立位アライメント不良は関節可動域訓練や筋力増強訓練で解決できないことがある。運動器を「情報器官」と捉える視点に重きを置く認知運動療法を行うことで、良好な結果を得た。症例は、術後急性期を過ぎた矯正中に下腿三頭筋の疼痛と立位アライメント不良が生じていた。特徴として、足関節背屈の運動を中足部付近の伸展で行われると誤認していた。そこで単軸の不安定板を使用し、注意の向け方を援助しながら認識を改善していった。結果、背屈時の疼痛の軽減と立位アライメントの改善を認めた。運動器を「情報器官」として捉える認知運動療法は、変形矯正中に出現する疼痛のコントロールや立位アライメントの改善に有用であると考えられる。